

巨人小田実を追想する。

エッセイスト 近藤節夫

一、巨星逝く

作家であり、平和活動家でもあった小田さんが逝って早や半年が過ぎた。目を閉じていると今でもあの人懐っこい小田さんの笑顔、急き込むような語り口、大きな声、頑丈そうな体躯がふっと浮かんでくる。積み重ねた知識と現場を踏んだ自信に裏打ちされた臨場感覚と行動力学、そしてチャレンジャー精神とパワーを内に秘め、類まれなりーダーシップと行動力によって多くの人びとに力と勇気を与えてくれた。誰からも好かれ、人間好きで、抱擁力のある、まれに見る魅力的な人だった。まさに男が惚れる男だった。

昨年七月三〇日、多くの人びとから慕われた小田さんは、胃癌に冒され多くの業績と思いを残され浄土へ旅立っていかれた。葬儀は八月四日、東京・青山葬儀所で盛大に執り行われ、各界各層から所縁のある大勢の人が参列された。暑い日ざしの中で建物の外のテントにはたくさんのお葬者が静かに焼香の順番を待っていた。宮城まり子さんの司会進行で始まった葬儀も終りに近づき、促されるままに筆者も祭壇に飾られた遺影に手を合わせ、小田さんに心からの感謝の気持ちを捧げて永遠の別れを告げた。鶴見俊輔氏、加藤周一氏、ドナルド・キーン氏、吉川勇一氏ら多くの参列者が感動的な別れの言葉を述べ、弔電が披露された中で、とりわけ筆者の胸を打ったのは、金大中・元韓国大統領のほばしるような感謝に満ちた惜別の言葉だった。

「日本で拉致され死刑宣告まで受けて軟禁状態にあった時、小田先生は韓国までやって来られて私を励まし救出活動をやってくれました。そのおかげで私は自由になり大統領にもなることが出来ました。小田先生にはいくら感謝してもし過ぎることはありません」と切々と訴えるメッセージだった。

葬儀が終り、小田さんのご遺体を乗せた車が葬儀所を離れるとき、居並ぶ参列者の間から遠慮がちだが、思いがけず感謝と惜別の気持ちたちが籠った拍手があがった。それは次第に大きくなりすべての参列者の湧き上がるような拍手となつて、車列が道路へ立ち去るまで鳴り止むことはなかった。最後の葬送の場で、自然発生的に小田さんに対する感謝の気持ちごととあふれ出た、生前の小田さんの業績と人柄を象徴する熱い光景となつたのである。シーンとくる感動的なシーンだった。

葬儀後「へ平連」「ベトナムに平和を！市民連合」の略を主とする、小田さんに親しい人たちから、小田さんを追悼するデモ行進への参加を誘われ、実に四〇年ぶりにデモに加わり、「反戦」歌《We shall overcome》を唱へて街頭行進した。それはマス・メディアを通して全国に広く伝え

られた。

二、ギリシヤ文学者・小田実

昨年四月、小田さんと「平連」とともに活動された、作家・小中陽太郎氏の個人的な集まりの場で、小中氏から初めて小田さんが癌を患っていると伺った。すでに自分が癌であると悟った小田さんは覚悟したのか、衰弱した身体をおして、その一ヶ月前の三月には玄順恵夫人を伴いトルコ各地を訪れた。東大で古代ギリシヤ文学を学び、それが因でベストセラー書「何でも見てやろう」を書く下地となった、フルブライト留学中は古代ギリシヤ文学を弄ぶような言辞を弄してもいたが、実際には古代ギリシヤ文学について息長く研鑽を積み、晩年に至ってもなお持ち前の好奇心と探究心で、ギリシヤ古代都市群が散在するトルコ国内の所縁の地を訪れたのである。

小田さんがいつ「ろから古代ギリシヤ文学に興味を持たれたのかははっきり分らないが、「私は大学院でふしぎなものを専攻している学生であった。私の専攻は古代ギリシヤ語であり、その文学であったのである。英語で『それは私にとってギリシヤ語である』と言えば、チンプンカンスっぱり判らぬ、という」ことであるが、このことは「いついた試験(フルブライト留学試験・筆者註)には好都合なことであったかもしれない。私は根がおめでたいほうだから……」(「何でも見てやろう」より)と自分自身が他人とは並外れた考えを持っていることを自覚していて、当初は古代ギリシヤ語を多少揶揄するような言動で周囲を煙に巻くパフォーマンスもあった。しかし、年齢を重ねるに従い、アメリカやヨーロッパの近代社会の発展と、同時に内に潜む矛盾を知るにつけ、徐々に古代への回帰、温故知新の考えが固まっていたのではないかと思っている。それは、後に紹介する夫人からの書簡の中で浮かび上がってくる。

東大で古代ギリシヤ文学を研究し始めたとき、幸いにも研究室にはギリシヤ文学の碩学・呉茂一教授を頂点にして、後に東北芸術工科大学長を務めた、現日本学士院院長・久保正彰東大名誉教授を始め錚々たる俊秀が揃っていた。小田さんはこの英才たちの中で磨かれていった。恩師呉教授は、学級肌とは程遠い幾分変わり種だった若き小田さんを「このほか可愛がって指導し、小田さんも恩師を慕っていたようである。呉教授はたびたび湘南海岸・辻堂の海に近い別荘風の自宅へ小田さんを招いては、夕食をともにしている。辻堂のお宅を訪れた東大生小田さんは、高校時代に書いた処女小説「明後日の手記」(呉教授没後の蔵書整理の際鎌倉図書館に寄贈された)について熱く語り、「東大の入試では英語は多分百点だったと思うが、解析(当時の入試科目の数学は、解析1、解析2、幾何、3科目の内2科目選択だった・筆者註)は白紙でした」とか「高校は大阪の夕陽丘高校で、有馬稲子は同窓です」などと気炎を上げていたことを、傍らで見ていた呉教授の子息で筆者の湘南高校時代の同級生だった呉忠士君(元・九州三井アルミニウム工業(株)専務取締役)が証言してくれた。温かい師弟の契りは終生続き、小田さんがフルブライト留学中にも金の無心を友人に訴えてきたことを小耳に挟んだ恩師が心配して相談に乗ってあげたり、一九六三年から六六年にかけてローマで研究活動に当たっていた尊敬する恩師のもとを

度々訪れては、薫陶を受けつつ疲れた心を癒している。学級肌の師は、はみ出し気味の弟子に対しても厳しい指導、教育を課したと思われる反面、羨ましくなるほど微笑ましい師弟関係であったことが想像出来て、どことなく心温まるものがある。

小田さんが古代ギリシヤ文学に傾倒していたのは、神秘的な古代人の世界に魅了され耽溺していったということもさることながら、このように古代ギリシヤ文学を取り巻く日本国内の温かいアカデミックな環境と、心を許せる親しい人間関係に取り込まれていたことが影響していたのではないかと想像している。

今年一月夫人から葬儀と思い出の一部を記録したDVDに添えて、丁寧なご挨拶状をいただいた。その中に身近な「人生の同行者」ならではの、専門的に分析されたこんな文章が綴られていた。

「……小田は、クラシシストでした。洋の東西を問わず、典雅なものが好きでした。大阪で生まれ育った彼にとつて、近代的・現代的なものは自明なこととしてあつたからでしょうか。いつも人類文明の源流をさぐってみたいという知的好奇心にあふれていました。

そして終生手ばなすことなく大切にしてきたものがありました。

それは、古代ギリシヤ(アテナイ)文学と思想、哲学でした。とりわけロンギノスの『崇高について』は、学生時代からずっと興味を持ち続け、六十代に入ってから翻訳を完成させ、ついにはロンギノスとの共著まで書き上げてしまつほどでした。そして最近までホメーロスの『イーリアス』(第一巻)を訳していました。

小田の文学観には、ギリシヤ悲劇と喜劇が深く投影されているように思います。

ギリシヤ悲劇は、運命対人間の意志、そして客体と主体の対立、衝突、緊張が主題です。重要なのは、運命は『国家の政治』を媒介として人間に重くのしかかる、きわめて政治的なドラマだということなのです。

人間の意志を運命の高み―崇高―にまで上げるものがロンギノスのいう文学でした。『読んで心が慰められるだけでなく、読む人の心を鼓舞し、勇気づけ、精神を一段高いところへ引き上げるような小説が書きたい』と小田はよく言っていました。

ただ古代ギリシヤの知識人は、それができるのは高貴なる魂を持った貴族だけだと考え、人びとは大気として、ひとくくりに片づけられていたことに、小田は納得がいかなかったようです。小田は、泥ぬまの中の、普通の人びと、小さな人間の崇高を問題にする必要があると考えていました。

古代ギリシヤにおいて同じような考えを持ち、作品を書いたのは小田の好きだった喜劇作家アリストパネスでした。病に倒れる直前までトロイ遺跡や黒海沿岸のギリシヤ植民地都市トラブゾンを旅したのも、何か言いようのない因縁を感じてしまいます……」

ある面で古代ギリシヤは小田さんにとって永遠のテーマだったのではないだろうか。

初めて小田さんの深刻な病状を小中氏から伺ってから三カ月後の七月八日、小中氏はNHK名古屋支局のディレクター時代に制作した《小田実原作》『しようちゅうとコム』という、四日市コンビナートの公害を風刺的に描いたテレビ・ドラマのリバイバル上映会を東京・丸の内ホールで

行った。そのドラマ後半部でせつかちな声でおしゃべりする小田実さんについて、小中氏はその舞台上的挨拶で、もしかすると来てくれるかも知れないと一縷の望みを託していたが、小田さんはもう危ないようだと厳しい報告をされた。余命もあまり長くはないと知らされ愕然とした。小中氏は、「放送レポート」本年一月号誌上に「小田実を送る」と題して寄稿されておられるが、その中にショックを受けた筆者の正直な気持ちを表わしたコメントを取り上げてくれた。「小田さんに多大な影響を受けた私としては、病状を知り暗澹たる気持ちである」。

そして、その僅か三週間後の七月三〇日、小田さんは多くの人びとに惜しまれながら永遠に旅立っていかれた。

三、行動する人

小田さんは筆者に対しても「何でも見てやろう」以来、思想面でも行動面でも多大な影響を与え続けてくれた。その足跡は、「何でも見てやろう」を起点に、ベトナム反戦運動へ突き進み、亡くなるまで問題提起をして市民運動と平和運動に関わり続けた。筆者はその大きな背を見ながらただ随って行くだけだった。小田さんは、いつの時代にも根源的な問題解決のために先頭に立って、常に批判的な立場から解決策を考えるスタンスを死の直前まで崩すことはなかった。その凜とした姿勢には、一貫して揺るがぬ信念が貫かれ、決してぶれることはなかった。

「何でも見てやろう」を繰り返し読み、また、あらゆる著書を片っ端から読んで小田さんの深い教養に裏打ちされた活動に強い共感を覚えたのも、それが行動に根ざしたものだ。だからである。世間が目を見張る社会的な活動の中心には常に小田さんの姿があった。自ら実践する行動哲学が、小田さんのバックボーンだった。他人に頼らず自ら先頭に立って行動する。この強い信念が多くの人びとの共感と信頼を得て、後に続く人たちをも勇気づけた。

ベトナム戦争がエスカレートするに従い、筆者も次第にベトナム反戦運動への関わりを深めていった。ついに矢も盾もたまらず、戦争の本質と意義、そして反戦運動の正当性を追求し確認するために、単身銃弾飛び交う激戦の地・ベトナムへ出かけ、危険な場面に遭遇したのも、小田さんの「見えざる手」が強く背中を押してくれたからではないかといつの頃からか思えるようになった。

一九七〇年代まだ学生運動が盛んだったころ、あるテレビ局でベトナム反戦シンポジウムが開催され、筆者にとって母校・湘南高校の先輩である作家・石原慎太郎氏（現東京都知事）が、小田さんと丁々発止と渡り合った際、行動しようとしないうちに若き石原氏の挑発的な発言に些か興奮した小田さんは、「いつも君はそんな風に言うだけで、茶化すからダメなんだ」と顔を紅潮させて一喝した。これには流石強気の石原氏も気まずそうに苦笑いして、口籠ってしまった光景が鮮明に頭に焼きついている。

熱血漢だった小田さんは、日本のみならず海外でも精力的に活動していた。ユー・ゴスラヴィアの内戦、そして分裂後、アメリカやNATO加盟国では、セルビア・モンテネグロのミロシエビッチ大統領に対して露骨に不信感や不満を増幅させていったが、これと連動してセルビア・モンテネ

グロ国内でも反ミロシエビッチの動きが台頭し先鋭化して、連日反対派のデモが絶えなかった。

あるときセルビア・モンテネグロ(現セルビア)の首都ベオグラードを訪れた小田さんは、窓外から聞こえてくる反ミロシエビッチのデモ隊から沸きおこるシュプレヒコールを耳にして血が騒いだのか、自分も一丁やったるか、と勢い込んで叫んだ。そのとき通訳を務めていたベオグラード在住で筆者の学生時代の友人、山崎洋君(ゾルゲ事件に関わり網走刑務所で獄死した、クロアチア人ジャーナリスト、フランコ・ド・ウケリッチ氏の遺児)は、

「あのデモの参加者は学生ばかりで国民全体から後押しされたものではない。これに労働者が増われれば力強い大衆のデモになるが、いまはこのまま静観した方がよいでしょう」とやんわりと自重を促したと、今年一月一時帰国し食事をともにしたとき、笑いながらそつと話してくれた。小田さんはそのくらい行動的で血の気も多かった。

小田さんが前記のように古代ギリシヤ文学を専攻し、造詣が深いのはごく当然としても、ギリシヤ人とギリシヤという国家に対して、ノスタルジアのような気持ちを抱いていたことは、その著書からも窺いが知ることができるとりわけ、アテネ市内に周囲を睥睨するかのよう屹立するアクロポリスの丘を指して、

「ギリシヤで、いやヨーロッパで、私がかつとも感動したものとえば、私はためらわずにアテネのアクロポリスの丘をあげるだろう。私にとって、それがギリシヤであり、またヨーロッパの、もっと大きく言えば『西洋』というものの、すくなくとも一つの根源であつた……」(「何でも見てもやろう」より)と言つほど没入している。

筆者もいつからかアクロポリスを訪れることが喫緊の念願となり、永年の念願叶い初めてその威容を目の当たりにしたときは、思わず感激し、小田さんに負けず劣らず興奮した。いつもの儉約癖を一時封印して大枚をはたき、アテネ市内でアクロポリスの絶景を眺められる、王宮前の五つ星ホテル、グランド・ブリターニエの角部屋に滞在した。朝な夕なに飽きもせずそのライトアップされた、あまりにも耽美なアクロポリスを夢うつつの中で眺め、古代アテナイ人たちの叡智とエネルギーに思いを馳せ、感激に浸っていたものである。日中は、アテネ市内を歩き回り、人間好き、外国人好きなギリシヤの人たち(「外国人が好き」『フィロクセノス』という世界的にも珍しいギリシヤ語がある)に取り巻かれ、小田さんの二番煎じのパフォーマンスを演じていた。筆者の拙いエッセイ「フィロクセノス」が、二〇〇三年ギリシヤ政府観光局長賞入賞の榮譽をいただいたのも、間違いなく小田さんの示唆のおかげである。

四、正義と信念の人

いま改めて小田さんの著作に目を通して。「六〇年安保闘争」当時は、小田さんはアメリカにいて運動をリードする立場にはいなかったが、安保闘争で一敗地に塗れ、敗北感と挫折感に打ちひしがれ、進歩的な動きに敏感だったわれわれ当時の学生たちに、新たな目標であるベトナム反戦運動へ導いてくれたのは、まぎれもなく小田さんをはじめとする、リベラルな有識者の地道な活動だった。筆者の未熟な思想形成や、破天荒な行動の原点となり、出発点となった

のは、言うまでもなく学生時代のゼミ活動と「六〇年安保闘争」であり、さらにその後のベトナム反戦運動である。その反戦運動の中で、担い手の中心だった小田さんには、燃えるような情熱と脇目も振らずに慕進するエネルギーにより、周りがいくら足掻いてもとても及ばない大きな存在であることを思い知らされた。

甚大な被害と犠牲のうえに、長い道のりを経て一九七五年四月、ベトナム戦争は終結した。残虐な戦争を止めさせようとの純粋な思いだけで、多くの市井人が参加した、市民運動の草分けである「ベ平連」の活動が、戦争終結へ大きなエネルギーとなったことはまぎれもない。

今日社会には、大きな社会的矛盾と政治腐敗、汚職、欺瞞、偽装、怠惰、裏切り、墮落、金権主義等々の悪徳が充満している。相変わらず小田さんの最も忌み嫌ったアイテムばかりが蔓延している。流石に小田さんの百人力をもってしても、世の陰湿で隠れた悪まではとても根絶しきれぬものではなかった。しかしながら、小田さんは大きな不正、破滅へ突き進む泥道をブロックするアイデアを暗示してくれた。われわれは、ひたすら「ベ平連」発足時の魂を持ち続け、地道に利他的な活動を続けていくよりほかに道はない。たとえ卑劣な圧力に晒されても小田さんが身を賭して行動し作り上げた、正義のために行動するムーブメントを決して絶やしてはならない。最後の最後まで、「九条の会」の活動を通して、憲法改正に反対し続け、死の直前まで『自由』『民主主義』『平和憲法』の三つを結びつけ、具現させた国は日本だけである」とまで主張し続けた小田さんの強固な遺志を受け継ぎ、平和憲法を護り抜くことこそが、改憲の動きの最中に討ち死にされた小田さんの崇高な気持ちに応える道であると信じている。

小田さん あなたへの感謝の気持ちは語り尽くせません。

小田さん あなたのおかげで充実した人生を送ることが出来ました。

小田さん あなたにはまだ教え導いていただきたかった。

小田さん いつか浄土で語り合いますよ。

小田さん どうぞ安らかにお眠りください。

小田さん 本当にありがとうございます。

小田さん さようなら。

合掌

(本誌に小田実の写真三葉と朝日新聞掲載記事を添付)